《資料》

竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（六）

―― 25蛍香～30藤袴香 ――

矢野環
岩坪健
福田智子

本稿は、矢野環・岩坪健・福田智子「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一一月）、および同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（二）1桐壺香～6末摘花香」（『社会科学』第43巻第4号、二〇一四年二月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（三）7紅葉賀香から12須磨香」（『社会科学』第44巻第1号、二〇一四年五月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（四）13明石香～18松風香」（『社会科学』第44巻第2号、二〇一四年八月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（五）19薄雲香～24胡蝶香」（『社会科学』第44巻第3号、二〇一四年十一月）の続編として、25蛍香から30藤袴香までの六つの組香の翻刻と考察をおこなうものである。資料に関わる基本的な説明は『社会科学』第43巻第3号を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、『同』第43巻第4号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「（朱）」と示し、一面の終わりには〝」〟を付して丁数を記す。

一、考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）『源氏物語』との関わり、というふたつの観点を設ける。（1）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第43巻第4号）を参照されたい。

一、巻末には影印を付す。

25　蛍香

【翻刻】

△蛍香

こゑはせて身をのみこがす蛍こそ
　いふよりまさる思ひなるらめ

一　試なし。

一　十炷香の札を用ゆ。

一　三炷開（ヒラキ）、二炷聞（キヽ）、一炷聞、二炷聞、一炷聞、二炷聞、一炷聞也。

一　一二三の香、各四包、客香二包（一包充別香を包）、都合十四包の内、」八三オ十二包出香とす。

一　地香十二包の内、一二三の香一包充取て、三炷打交て一結ひとして、初に三炷開にして焚出す。残九包の内、二包除け、客二包加へて九包として打交、二炷聞（三組）、一炷聞（三包）と分て、二炷一炷と打替へに焚出し、終の一包を蛍と名付て専一に聞くべし。

一　本香三包焚出し、包紙を開く也（此三炷は聞覚る。斗にて札は不打。）其後に二炷」八三ウ聞、一炷聞、二炷聞、一炷聞、二炷聞、一炷聞と六度に焚出し、九包皆焚終て、一同に包紙を開くべし。

一　聞様、初の三炷を試の心に聞て、札は打に及ず。初炷を一と極め、二炷目を二と定め、三炷目を三と定て、始終其通り札をうつを中りとす。

一　終の一包は、香銘と同じ札銘を打を中りとす。始め三炷開に香銘と札と異銘を打違置く故に、」八四オ終一包の出様によりて、同名の札不足する事あり。其時は残たる何札にても一枚にウ札を添て二枚打べし。

　假令始三炷の内、一の香を二と定たる時に、八包の内、一の香三包ながら出れば、二の札三枚ともに打つ。其後、蛍香に二の香出たらば、打べき二の札なき故に、残たる三の札とウの札を二枚打也。皆是に準知べし。

一　記録は、三炷聞は始より一二三と認置く。二炷聞より」八四ウ点をかくるべし。ウ独聞三点、二人より二点、地香独聞二点、二人より一点充也。蛍の香独聞五点、二人四点、三人より三点充也。聞違は何人にても星を三つ充付るべし。三炷聞と一炷聞は、一二三ウと認め、二炷聞は、組合の名目を認る。終一炷は中りたるを朱にて認るべし。

　二炷組合認様、左のことし。

一一（朱）　光君　　二二（朱）　匂宮」八五オ
三三（朱）　玉かづら　　ウウ（朱）　几帳の帷子
一二（朱）　虫の思ひ　　一三（朱）　いふより増る
二三（朱）　みがくれ　　二一（朱）　汀のあやめ
三一（朱）　鳰とり　　三二（朱）　わか駒

一ウ（朱）　昔の跡　　ウ一（朱）　くず玉
二ウ（朱）　繪物語　　ウ二（朱）　駒くらべ
三ウ（朱）　思ひあまり　　ウ三（朱）　空焼物

一　記録認様左のごとし。」八五ウ

蛍香記　二三除（朱）　黄海紋の人は、一の香に二の札三枚打たるによつて、蛍の香に打べき二の札なし。故に三の札とウの札二枚打也。

〔表〕」八六オ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一　　前
二　　後
三　　4－1×3＝3×3－2
ウ　2　　別香 各1
＝9

本香として、地香を「一」「二」「三」の香、各四包と、客香を別香で二包用意し、計十四包の中から十二包を出香する。

まず、「一」「二」「三」の地香を各一包、計三包を混ぜて一結びとする。この三炷は、本香ではあるが、試香のように、香を聞き覚えるだけで札は打たない。なお、三炷すべてを焚き終わってから包紙を開き、一炷目から順に、「一」「二」「三」のどの香であったかが披露される。この香銘は、最後の十二炷目の答えに関わるので覚えておく。

次に、残り九包の地香から二包を除き、客香二包を加えて、全九包とする。それらの香を、二炷聞きと一炷聞きとを交互に三回繰り返し、すべてを焚き終えてから包紙を開き、正答を披露する。答えには十炷香札を用いる。四～十一炷目の答えが地香と同香の場合、一炷目と同じ時には「一」の札、二炷目には「二」の札、三炷目には「三」の札というように、香が焚かれた順序に合わせて札を打つ。一方、最後の十二炷目（蛍の香）には、地香の香銘と一致する札銘で答える。すなわち、「一」の香には「一」の札、「二」の香には「二」の札、「三」の香には「三」の札を打つ。そうすると、場合によっては、答えの札が不足することがある。その時には、残った札一枚に「ウ」の札を添えて、二枚の札を打つ。

香之記には、最初の三炷聞きは、一炷目から順に「一」「二」「三」と記しておく。四炷目の二炷聞きから点数を記す。客香は、独り聞き三点、二人からは二点だが、地香は、独り聞き二点、二人からは一点である。最後の「蛍」の香は得点は高く、独り聞き五点、二人は四点、三人からは三点を加える。聞き違えは、人数に関わらず星を三つ付す。記録紙には、三炷聞きと一炷聞きは「一」「二」「三」「ウ」と記すが、二炷聞きには、答えの組み合わせによって、該当する「組合の名目」を記す。最後の一炷は、聞き当てた場合のみ朱で記す。

蘭之園本では、地香「匂」「玉」各二包と客香「蛍」六包（別香二種類、各三包）、計十包を用意する。そして、「蛍」一包に「匂」あるいは「玉」一包を結んで二包四組とし、また、「蛍」の残り二包を結んで一組とした計五組の二炷聞きになっている。一方、竹幽本は、三炷聞きに二炷聞きや一炷聞きが混じる。また、十六の名目が挙げられる竹幽本に対し、蘭之園本では「匂ふ宮」「虫のおもひ」「玉かづら」「いふより増る」「几帳のかたびら」の五つであり、これらはすべて竹幽本にも存する。蘭之園本に比して、竹幽本は、全体に複雑な組香の構造をもっている。

（2）『源氏物語』との関わり

前述のとおり、竹幽本に列挙された記録の名目は十六あり、二つめの「匂宮」から六つめの「いふより増る」の五つは蘭之園本と共通する。残り十一の名目は、竹幽本が、蘭之園本、あるいは蘭之園本が依拠した資料によって追加したと想定される。なお、「匂宮」は匂兵部卿宮とも言い、光源氏の孫で、当巻ではまだ生まれていないが、尾崎左永子氏・薫遊舎校注『香道蘭之園』（増補改訂版、二〇一三年、淡交社）に、

なおここに宇治十帖の「匂ふ宮」とあるのは不審。「蛍兵部卿宮」と「匂兵部卿宮」ととり違えたものか。（三三六頁）

と指摘されるように、当巻に登場する「兵部卿宮」（③一九六頁）[1]を誤解したのであろう。

「匂宮」のほか、一つめの名目「光君」もまた、当巻には見られない。それは桐壺巻で、高麗から来た人が元服する前の光源氏を見て、光り輝く君と賞賛して名づけたものである（①四四・五〇頁）。この「光君」をはじめ、蘭之園本にない竹幽本独自の名目は、『源氏小鏡』[2]にも一つも掲載されていない。これは、『源氏小鏡』が、巻全体の内容ではなく、一場面のみを取りあげていることにもよるであろう。一方、物語本文には、竹幽本の名目のうち「駒くらべ」という語のみが見当たらないが、その催し自体は物語に描かれている。ちなみに『源氏物語』の版本で江戸時代に最も流布した延宝三年（一六七五）刊行の『源氏物語湖月抄』には、全巻に及ぶ年立が付いているが、蛍巻には「五月五日出　二馬場殿　一給事　騎射並ニ競馬ノ事」という項目が立てられている。その文中にある「競馬」が、名目の「駒くらべ」のことである。よって竹幽本独自の名目は、物語本文に拠って補われたものと推定される。

竹幽本の名目をすべて用いて、当巻のあらすじを記すと以下のようになる。なお名目には傍線を付した。

光君は愛していた夕顔に先立たれたのち、その娘玉かづら（玉

鬘）を養女にした。多くの貴公子たちが玉鬘に求婚したが、なかでも光源氏の弟にあたる匂宮（正しくは蛍宮）がとりわけ熱心であった。蛍宮が玉鬘を訪れたとき、光源氏は空焼物（空薫物。③一九八頁）をして迎えた。また、多くの蛍を几帳の帷子（③二〇〇頁）に包み、光が漏れないようにしておき、玉鬘を垣間見ていた宮の前で蛍を放し、その光で玉鬘の姿を浮かびあがらせた。それを見た宮はますます恋いこがれ、次の恋歌を贈った。

なく声も聞こえぬ虫の思ひだに人の消つには消ゆるものかは（③二〇一頁）

そこで玉鬘は、とりあえず次のように返した。

声はせで身をのみこがす蛍こそ言ふより増さる思ひなるらめ（③二〇一頁）

五月五日は端午の節句で、くず玉（薬玉。③二〇五頁）を柱に掛けたり身に付けたりして、邪気を祓った。また、その日は菖蒲の根の長さを競い合う催しがあり、長い根に結び付けられた蛍宮からの手紙には、次の和歌が書かれていた。

今日さへや引く人もなき水隠れに生ふるあやめのねのみなかれん（③二〇四頁）

この日は宮中では駒くらべが開かれ、光源氏の邸宅でも夏の御殿で行なわれた。その御殿に住む女君（花散里）は、光源氏と和歌を交わした。

その駒もすさめぬ草と名に立てる汀のあやめ今日や引きつる（花散里の歌。③二〇九頁）

にほどりに影を並ぶる若駒はいつかあやめに引き別るべき（光源氏の歌。③二〇九頁）

玉鬘は縁談よりも絵物語（③二一〇頁）に熱中していた。その亡き母に似ている姿を光源氏は見ているうちに、いつしか思いを寄せるようになり、次の和歌を詠んだ。

思ひあまり昔のあとを尋ぬれど親に背ける子ぞ類なき（③

二一四頁）

26　常夏香

【翻刻】

△常夏香

なでしこのとこなつかしき色を見ば

もとの垣根を人や尋む

一　試なし。

一　十炷香の札を用ゆ。

一　一二三の香、各三包充、客香一包、都合十包出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。」八六ウ

一　一二三の香、各二包充、以上六包と、一二三ウの香、各一包充四包と、左右に分置て、初に六包の方より二炷聞に三度焚出し終て、又四包を一炷聞四度に焚出すべし。

一　無試十炷香の例に、一二三と順を立て札打べし。出香の度に、折居（一二三四五六七八九十と廻して、札を受、記録には一炷聞より上に、四炷の札銘を写て、其下に二炷聞六炷の札銘を認て、後に十炷の包紙を一同に開てよし。」八七オ

一　記録点は、上に記たる一炷聞斗りに点をかけ、二炷聞の中たるには点なしに、三色（是撫子の色也。）の地を認る、左の如し。

一の札片中は　白と書　二の札片中は　赤と書

三の札片中は　紫と書　各両中は　撫子と書

地香一点、客香二点、各独聞の差別なし。褒美に聞の下に、皆中は紅梅大臣と認る。不中はちる花と認る也。記録大概次に顕す。」八七ウ

常夏香之記（二炷組合毎の内にて、二炷ながら聞たるを、両中と云。一炷斗り聞たるを片中と云なり。）

〔表〕」八八オ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一　前　後

二

三　3 − 2×3 = 1×3

ウ　1　= 4

本香には、「一」「二」「三」の地香、各三包と、客香一包の、計十包を用意する。それらを、「一」「二」「三」の香、各二包、計六包と、「一」「二」「三」「ウ」の香、各一包、計四包の左右に分ける。そして、初段は、前者六包について、二炷聞きを三度行い、また、後段は、後者四包について、一炷聞きを四度行う。

答えには、十炷香札を用いる。試香がないため、無試十炷香

と同様に、一炷目には「一」の札を打[*]ち、二炷目以降は、異香が出るたびに、「二」「三」の札を順に打っていく。初段は二炷ごと、後段は一炷ごとに折[*]居を廻す。

香[*]之記には札銘を記すが、後段を上に、初段を下に書き、すべて香を焚き終わってから包紙を開いて、答え合わせをする。記録点は、後段の一炷聞きにのみ、地香一点、客香二点を加える。聞き当てた人数による点数の多寡はない。初段の二炷聞きには、聞き当てても得点はないが、二炷ともに聞き当てた時には「撫子」、一炷のみでは、「白」（一の札）、「赤」（二の札）、「紫」（三の札）という撫子の色を記す。なお、これらの名目の下に、初段・後段すべてを聞き当てた場合は、褒美として「紅梅大臣」と記し、一方、すべて聞き違えた場合には「ちる花」と記す。

蘭之園本では、「白」「赤」の地香、各三包と、「紫」の客香三包の計九包を用意し、二包を結んで二炷聞きとし、残り一包を「紅梅大臣」と名付けて一炷聞きにするという構成になっている。これらの香銘は、竹幽本においては、香之記の名目として用いられる。また、蘭之園本が、香之記において、減点を「露三」「露一」と標記するのは、竹幽本には見られない趣向である。さらに、蘭之園本の名目のうち、「なでしこ」「紅梅のおとゞ」は、竹幽本にも見出せるが、「とこなつかしき」「もとの垣根」「人や尋ん」「山がつの垣根」「もとの根ざし」「だれに尋ん」は蘭之園本にのみ存する。竹幽本の方がより複雑な組香ではあるが、蘭之園本には、竹幽本にはない名目が多く用いられている点に注意を要する。

（2）『源氏物語』との関わり

記録の名目のうち、「紅梅大臣」は、物語本文には見られないもので、光源氏の死後、紅梅巻で活躍する人物に、後人が付けた呼称である。『湖月抄』には、物語本文の傍注に「柏の弟也。後に紅梅大臣也。」と記されている。その人物は、常夏巻ではまだ大臣ではなく、「弁少将」（③二二四頁）と呼ばれていた。名目では、登場人物の当該巻時点における地位や呼称ではなく、物語全体を見通した上で、最も代表的な呼称に拠っていることがわかる。また、すべて聞き違えた時の名目「ちる花」は、物語本文にも『源氏小鏡』や『源氏大鏡』[3]にも見当たらないが、当該巻名でもある植物「常夏」（撫子）の花にちなんで用いられたのであろう。

なお、巻名歌（③二三三頁）は、光源氏が養女の玉鬘に詠んだものである。初句の「なでしこ」は玉鬘の比喩で、二句目の「とこなつ」も同じ花を指す。和歌においては、「撫でし子」は頭を撫でてかわいがる子に例えて子を思う歌に、また「常夏」は寝床の「床」に掛けて恋歌によく用いられる。二通りの名称を詠みこんだ巻名歌は、養女を恋人として思い始めた源氏の心

の揺れを暗示している。

27　篝火香

【翻刻】

△篝火香

かゞり火にたちそふ恋の煙こそ
　世にはたえせぬほのほなりけれ

一　試なし。

一　十炷香の札を用。

一　夕月夜の香、琴を枕の香、荻の音（ヲト）の香、篝火の香（客香也。）、各三包充、恋の煙の香一包（ウ香也。）、都合」八八ウ十三包の内、十二包出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。

一　夕月夜の香、琴を枕の香、各二包充、荻の音の香一包以上五包打交、大包として上に左と記置也。篝火の香三包、恋の煙の香一包、交て其内一包除け（此一包は不用）、残たる地香四包を加え、合て七包よく交て、又大包にし、上に右と記置くべし。扨て、」八九オ左包より右包と、段々に一炷充取て焚出す。札も一炷毎に受てよし。

一　此式は、三枚有るウ札を、客香四炷に打合せる趣向より組侍たる也。札打様は、無試十炷香のごとく、夕月夜・琴を（一朱）（二朱）枕・荻の音と順を立て札をうつ。右包の内は、篝火三包と（三朱）（ウ朱）恋の煙一包交て、四包の内より一包除たる残三包交有る故に、其除香を第一に聞分」八九ウけて、此三炷に三枚有るウ札の打様有り。恋の煙除たると思ば、篝火三炷にウ札三枚打てよし。若又篝火三包の内を除たると聞はウ札三枚の内何番目に打たるが、恋の煙香と聞の通りを札皆打終て後に名乗紙に認出すべし。地香三炷は左五包の内にて試心に聞故に別条なし。

　初に打たるウ札、恋の煙と思ば　　初恋の煙と書」九〇オ
　中に打たるウ札、恋の煙と思ば　　中恋の煙と書
　末に打たるウ札、恋の煙と思ば　　末恋の煙と書
　ウ札三枚共に恋の煙無と思は　　篝火と書

右の内、聞に随ひ名乗紙に認出也。

一　記録点は、地香独聞二点、二人より一点充、篝火独聞三点、二人より二点充、恋の煙独聞四点、二人より三点充かくる也。除香中たる褒美に、左の」九〇ウ哥を認る。

　除香篝火　　上の句を書
　除香恋の煙　下の句を書
　行ゑなき空にけちてよ篝火の
　　便りにたぐふ煙とならは
　除香不中は　きゆる火と書

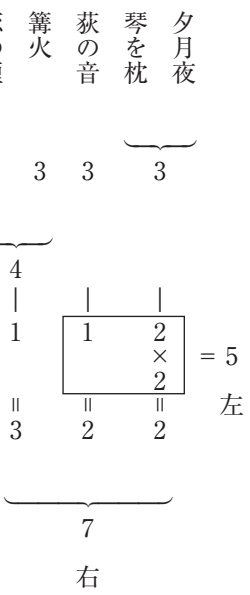
記録認様左の通り也。」九一オ

篝火香之記　篝火除（朱）

〔表〕」九一ウ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法



本香には、地香「夕月夜」「琴を枕」「荻の音」、各三包と、客香は「篝火」三包、「恋の煙」一包の、計十三包を用意し、そのうち十二包を出香する。

まず、「夕月夜」「琴を枕」の香、各二包と「荻の音」の香一包の計五包を、大きな包紙で包み、上に「左」と書いておく。また、「篝火」の香三包と「恋の煙」の香一包を交ぜ、これら四包のうち一包を除いて三包にしてから、残りの地香四包（「夕月夜」「琴を枕」各一包と「荻の音」二包）を加え、計七包を、大きな包紙で包み、上に「右」と書いておく。なお、除いた一包は使わない。

そして、「左」「右」交互に、一炷ずつ焚いていく。一炷焚かれるごとに、十炷香札を打つ。試香がないため、無試十炷香と同様に、一炷目には「一」の札を打ち、二炷目以降は、異香が出るたびに、「二」「三」の札を順に打っていく。客香は「右」の包みに入っているが、「篝火」三包と「恋の煙」一包の計四包のうち一包を除いている。このため、その除いた一包が「篝火」「恋の煙」のいずれかによって、すべて「篝火」の場合と、「恋の煙」一炷が交じる場合が想定される。そこで、客香三炷に対しては、まず同じ札を打った上で、名乗紙に、「恋の煙」が何番目に焚かれたかにより「初恋」「中恋」「末恋」と記し、なければ「篝火」と記す。すべて焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。

記録点は、地香の独り聞きは二点、二人以上は一点、「篝火」の独り聞きは三点、二人以上は二点、「恋の煙」の独り聞きは四点、二人以上は三点となる。客香のうち、包みの数が少ない「恋の煙」を聞き当てた時の得点が高い。また、名乗紙の答えの褒美としては、「行ゑなき空にけちてよ篝火の　便りにたぐふ煙とならは」という和歌のうち、「篝火」を除いた場合は上句を、「恋の煙」の場合は下句を、香之記の下段に記す。なお、聞き当てられなかった場合は、「きゆる火」と書く。

蘭之園本では、「一」「二」の地香、各二包と、客香「篝火」

四包の計八包を交ぜ、二包ずつ結び合わせて、二炷聞きとする。試香は地香のみ。客香を聞き当てた場合の点数が高い。竹幽本よりも簡略な組香だが、「夕やみ」「琴を枕」「夏の遅月」「たそがれ」「玉かづら」「秋の初風」「源氏」「恋の煙」「かゞりび」の九つの名目が示される。このうち「琴を枕」「恋の煙」「かゞりび」は、竹幽本にも香銘として用いられているが、その他は見られないものである。

（2）『源氏物語』との関わり

前述のとおり、蘭之園本にあって竹幽本にない名目は、「玉かづら」「源氏」の他、「夕やみ」「夏の遅月」「たそがれ」「秋の初風」の計六つある。このうち、「夕やみ」と「秋の初風」の二つは『源氏小鏡』に見られる。[4] また、「夏の遅月」についても、物語本文に「五六日の夕月夜はとく入りて」（③二五六頁）とあるところを、『源氏小鏡』では、「夏の夜の月、遅く出づるころ」と記しており、蘭之園本と『源氏小鏡』との関係は深い。竹幽本の名目はすべて物語本文に拠るのに対し、蘭之園本は『源氏小鏡』などの梗概書によると考えられる。

以下、竹幽本の香の名目をすべて用いて、あらすじを記す。

光源氏は養女の玉鬘に思いを寄せるようになり、琴の伝授を口実に足繁く訪れるようになった。秋になり、荻の音が身にしみる頃、夕月夜（夕月）が沈み、暗くなった室内で二人は琴を枕に寄り臥していた。源氏は帰りぎわに、庭の篝火が少し消えかかっていた[5]のを明るくさせ、篝火に事寄せて玉鬘に和歌（巻名歌）を詠んだ。

篝火に立ちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬ炎なりけれ（③二五七頁）

養父に懸想されて困惑した玉鬘は、次のように返した。

行方なき空に消ちてよ篝火のたよりにたぐふ煙とならば（③二五八頁）

香の名目は五つあるが、すべて物語の同じ場面に見られる（③二五六～二五七頁）。

28　野分香

〔以下、下巻「月」の巻。竹幽本の構成については「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一一月）参照。〕

【翻刻】

△野分香

風さはきむら雲まよふゆふへにも
　わする、間なく忘られぬ君

一　十炷香の札を用。

一　一二三の香、各三包充、ウの香一包、都合十包出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。

一　地香外に拵へ試に出す。客香試なし。」二オ

一　地香九包打交て、其内より三包取て野分と名付、初の出香とし、跡七包、後の出香とす（ウ香は野分過て後に加へ交るべし。）。

一　五炷目を風のとむらひと名付、七炷目を風折のかるかやと名付、九炷目を紫の薄やうと名付、ウ香を雲井の鳫と名付。此四炷聞中るをは其銘をしるして点をかける也。ウ香もし五七九番目に出たらば、雲井の鳫とは認ず、其番目の名目を書べし。不中は札銘の」二ウ一二三ウを認べし。

一　三炷目迄の野分は、札を打かへる也。一と聞ば二の札、二は三の札、三は一の札を打へし。此外の札を打替るか又は同名の札を打たるは、中りに成らず。又野分三炷ともに中らぬ人は、残七炷の内聞ても中りに立す、点星もなし。故に能く聞分て札をうつべし。假令、野分の内、一の香には定て二の札打を中りとす。」三オ一三の札を打たるは無点也。皆是に準知べし。

一　札打様の事。

○（朱）野分三炷の内

一の香と聞ば　二の札打べし。
二の香と聞ば　三の札打べし。
三の香と聞ば　一の札打べし。

○（朱）後七炷の内」三ウ

一の香と聞は　一の札打べし。
二の香と聞は　二の札打べし。
三の香と聞は　三の札打べし。
ウの香と聞は　ウの札打べし。

右の通打也。それ故に、野分三炷終と打たる札を記録に認置く。札は連中に返すべし（野分三祇の出次第にて、三炷共に同香なれば、同札六枚も打事あり。其為に札を返置也。）」四オ

一　記録点は、野分の内は、独聞四点、二人より二点充かくるべし。五炷目七炷目九炷目の中りは、客地香の差別なく、何人にても三点充、違たるは、露一つ充附る。其外にては、独聞の差別なく、客二点、地香一点充かくる。違露もなし。皆中は、褒美に聞の下に朱にて夕霧中将と認る也。記録大概左に顕す。」四ウ

　　艸稿

〔表〕」五オ

野分香之記（野分に札打替たる機合によつて、記録面には一二三の札の内、四枚記事有り。然ども本香并に打札ともに四枚出る事なし。艸稿の所にて見るべし（朱））

〔表〕

年号月日　糸薄紋は野分三炷ともに不中故に点星なし。（朱）」五ウ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一　コ　初・野分　後
二　3－3＝6
三
ウ　1　＝7

本香には、地香「一」「二」「三」の香、各三包と、「ウ」の客香一包の計十包を出香する。地香は、別に用意した試香を行うが、客香には試香はない。すべて焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。

地香九包のうち三包を「野分」と名付け、初段に用いる。残りの七包は後段の出香とする。客香は、「野分」を取り分けた後に加えるため、後段にしか出ない。

全十炷の中でも特に、五炷目を「風のとむらひ」、七炷目を「風折のかるかや」、九炷目を「紫の薄やう」と名付け、また、「ウ」香を「雲井の鴈」と名付けて、これら四炷を聞き当てた場合は、香之記にその銘を記して加点される。もし、「ウ」香が五・七・九炷目に出たならば、「雲井の鴈」ではなく、五・七・九炷目の名目を書く。聞き当てられなかった場合は、札銘（一・二・三・ウ）をそのまま記す。

答えには、十炷香札を用いる。初段「野分」には、札の打ち替えがある。すなわち、「一」の香には「二」の札、「二」の香には「三」の札、「三」の香には「一」の札を打つ。これ以外の札や同じ名の札を打っても、聞き当てたことにならない。また、初段「野分」の三炷すべてを聞き違えてしまった場合は、後段の七炷のうち聞き当てた香があっても、やはり聞き当てたことにならず、点にも星にもならない。従って、特に初段「野分」を聞き分けることが重要となる。なお、後段の七炷には、札の打ち替えはなく、聞き分けた香銘の札をそのまま打てばよい。

初段「野分」三炷を終えた時点で、打った札を香之記の草稿に記し、札を連中に返す。初段では札を打ち替えるため、後段でその札が不足する場合があるからである。香の出方によっては、初段で同香が三炷続くこともあるが、札の打ち替えにより、後段でも同じ札が三枚も必要となるといった場合が想定されよう。

記録は、草稿を書いた後に清書をする。初段「野分」では、独り聞き四点、二人以上だと二点である。五・七・九炷目には、客香・地香の区別なく、また、聞き当てた人数にも関わりなく三点を加え、聞き違えた時は、「露」をひとつ付け、一点引く。その他は、聞き当てた人が何人でも、客香は二点、地香は一点を

加え、聞き違っても「露」は付けない。すべて聞き当てた場合は、香之記の最下段に、褒美として「夕霧中将」と朱書きする。

蘭之園本は、当該組香を「香組十炷香の例」として挙げる。十包の一炷聞きで、三炷目までを「野分」とし、客香はその後に加えるという点は竹幽本と共通する。また、五・七・九炷目の扱いや名目、三炷目までの「野分」の札の打ち替えも同じである。わずかに、「三」の香を「ウ」の札に打ち替える点（竹幽本では「一」の札）、「野分」で札を打ち替えた分、後に札が足りなくなった場合は、「ウ」の札とともに二枚の札を打つ（竹幽本では「野分」の後、札を連中に返却する）点が異なる。

（2）『源氏物語』との関わり

記録の名目のうち、蘭之園本にはなく、竹幽本に用いられているのは、「雲井の雁」のみである。この名目は、少女巻に和歌の一部として見られ（③四八頁）、それを口ずさんだ女君の呼称になった。その他、「かるかや」「紫の薄様」「風のとむらひ」は『源氏小鏡』の寄合にある。[6] 一方、「風折のかるかや」は、『源氏小鏡』にも見出せないが、物語本文の「吹き乱りたる刈萱」（③二八三頁）に拠るものであろう。

記録に用いられる「露」は、通常の組香における「星」にあたる。「露」は野分巻に描かれた秋の御殿の庭によく出てくる（③二六三・二六四・二七三頁）ので、これにちなんで用いたのであろう。

名目に傍線を付けてあらすじを記すと、次の通りになる。

秋になり、光源氏が建てた六条院の中でも秋の御殿の庭はとりわけ見事で、露までも輝いていた。ところが例年よりも激しい野分（③二六四頁）に襲われ、嵐が過ぎ去ったあと、源氏は女君たちを見舞い、冬の御殿に住む明石の君にも風のとむらひをした。源氏の子息である夕霧中将も祖母たちを見舞った後、妹の部屋に立ち寄り、硯箱を借りて、紫の薄やう（③二八三頁）に、恋人の雲井の雁あての手紙を書き、それを風折のかるかやに付けて送った。

29　行幸香

【翻刻】

△行幸香

をしほ山みゆきつもれる松ばらに

けふばかりなる跡やなからむ

一　二炷開也。

一　十炷香の札を用ゆ。

一　一二三客の香、都合十二包打交、二包充結合せて焚出す四包の香、試に出す。外に拵へ。」六オ

一結二包の惣名を一番（ツガヒ）と名付る。

二包の内、初に出すを甲矢（ハヤ）、後に出すを乙矢と名付る。

但し

二包なからきくを諸矢といふ。

二包の内、一包きくを片矢といふ。

一　連中一人に人形二充持也。馬上の人形一間目、舎人の人形同溝の二間目に置、中り次第に人形二つ充先跡一同に進すべし。」六ウ

一　客香地香の聞の諸矢の中り一間進む。諸矢の聞續て二度より以上あれば褒美に一間の増を添て進むべし。甲矢（ハヤ）乙矢の内、片聞は不進（記録には。記す也。）

一　諸矢の二度續聞より已上は其度毎に鷹の鳥を賜ふとて、舎人の手に持する。其後二度目三度目には鷹の鳥を賜りても舎人に持せず其前に立置くべし。

一　御車は聞人付さる故に十人の内にて誰にても諸矢聞」七オあれば、一間充進むべし。二人あれは二間進、三人あれは三間進。皆かくのごとく、小塩山に行着と御車は留り動かず。

一　馬上の人形も小塩山に行着と馬よりおろして御車の供奉をする。其後は香は聞ても記録斗にて、人形の働なし。是を一の勝とす。一二三の勝迄なり。御車左右と後に人形を立るべし。

一　記録は、中り斗を認る。左のごとし。」七ウ

行幸香之記

〔表〕」八オ

行幸香立物圖

〔図〕」八ウ

〔図〕」九オ

同盤之圖　竪溝十一筋　横界十間

〔図〕」九ウ

〔図〕」十オ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一
二
三
ウ

コ

3＝12＝2×6

本香に、「一」「二」「三」「客」の香、計十二包を用いる盤物*である。伝書には明記されないが、香はそれぞれ三包ずつ用意するのであろう。これらの香を二包ずつ結び合わせて六結（六組）とし、一番から六番と名付ける。さらに、一結のうち、初に焚く香を「甲矢（はや）」、後に焚く香を「乙矢（おとや）」と呼ぶ。また、二包ともに聞き当てた場合は「諸矢（もろや）」、一包のみの場合は「片矢（かたや）」と

いう。なお、四種類すべての香について、本香に先立って試香[*]を行う。

さて、十人の連中は、一人につきふたつの人形を持つ。すなわち、馬上の人形と舎人の人形である。前者は盤の一間目に、後者は二間目に置く。答えには十炷香札[*]を用い、二炷開[*]きで香を聞き当てるたびに、ふたつの人形を同時に進めていく。

一結二包ともに聞き当てた「諸矢」は、一間進む。また、「諸矢」が二度以上続いた場合は、褒美として、一間を加えて二間進むことができ、その度に、鷹の鳥を賜る。最初は、鷹を舎人の手に持たせるが、それ以降は舎人の前に置く。一包のみの「片矢」は、「甲矢」「乙矢」いずれの場合も、香之記[*]には記載するけれども、人形を進めることはできない。従って、盤上の人形の進み方と香之記の得点（「諸矢」「片矢」の数）は、必ずしも一致しない。

御車は、連中のうちの特定の人が持つというわけではなく、誰かが「諸矢」を出す度に一間ずつ進む。二人だと二間、三人だと三間というように、聞き当てた人数分、進んで行き、小塩山に行き着くと、動かずそこに留まる。馬上の人形も行き着いたら、人形を馬から降ろして、御車の供奉をする。その後は、香を聞いても、記録だけに留めて、それらの人形は動かさない。最初に行き着いた人形から三着までを「一の勝」「二の勝」「三の勝」とし、人形を御車の左右と後に立てる。多くの場合、御車の後を人形が追いかけるかたちになるが、人形が御車の先に行く場合は、先払いに見立てられる。

蘭之園本も盤物で、竹幽本が蘭之園本をもとにしていることは明白である。ただし、竹幽本の「甲矢」は蘭之園本では「羽矢」という表記になっている。

（2）『源氏物語』との関わり

行幸巻では、冷泉帝が十二月に大原野に出かけた。この地にある大原野神社は、奈良の春日大社から移したもので、藤原氏の氏神が祭られている。冷泉天皇が大原野に到着すると鷹狩が催され、二羽の雉が、行幸に参加しなかった光源氏に贈られた。自宅でそれを受け取った源氏が返した和歌が巻名歌である（③二九三頁）。

「甲矢」「乙矢」「諸矢」「片矢」という言葉は、物語には見られず、すべて弓道の用語である。二本の矢を持って射るとき初めに使う矢を「甲矢」、あとの矢を「乙矢」、両方を合わせて「諸矢」、片方を「片矢」と呼ぶ。蘭之園本にも「片矢」以外の語が使われている。なお、「舎人の人形」の舎人は、蘭之園本にも登場する。物語の当該巻本文にはことさら明記されないが、帝の行幸に欠かせない従者として供奉させたものであろう。この「舎人の人形」が持つ「鷹の鳥」は、蘭之園本にもあり、物語本文

では、源氏に贈られた「雉、一枝」（③二九三頁）に相当する。

30　藤袴香

【翻刻】

△藤袴香

おなじ野丶露にやつるゝふちばかま
　あはれはかけよかごとはかりも

一　十炷香の札を用ゆ。

一　一の香、二の香、三の香、客香、各三包、都合十二包の内、九包出香とし、九包皆焚終て包紙を開くべし。

一　地香外に拵へ試に出す。客香試なし。」十ウ

一　本香十二包打交、六包除け残六包を二包充結合置べし。除たる六包の内より又三包取て一炷聞にして初二度終一度に焚出す（残三包は用る事なし）。

一　初一包一炷聞にして焚出す。是を玉鬘内侍と名付く。二炷目又一包焚出す。是を蘭（フチバカマ）と名付く。三炷目より二炷聞に二度焚出す。九炷目は又一包を一炷聞に出す。是を夕霧宰相と名付く也。」十一オ

一　夕霧の時、札打様は、蘭と違て打也。假令蘭の香一と聞ば、二三の札を打べし。又蘭二ならば一三の札を打也。蘭三夕霧ウと違たらば、打かゆるに及ばす。とかく同香と聞ば札打違へ、別香ならば聞の通札打なり。

一　記録点は玉鬘夕霧の中り何人にても三点充、違星二つ、客香独聞二点、二人より一点充、地香は皆一点充かくるべし。

一　香組合認様左のごとし。」十一ウ

初香（朱）　玉鬘内侍　　次香（朱）　蘭
終香（朱）　夕霧宰相　　一一（朱）　一の露
二二（朱）　二の露　　三三（朱）　三の露
ウウ（朱）　薄紫　　二二（朱）　妹背山
三三（朱）　おだへの橋　　三三（朱）　おなじ野
ウ一（朱）　はるけき野　　ウ二（朱）　葉わけの霜
ウ三（朱）　あふひ

一　記録認様左のごとし。」十二オ

藤袴香之記　一二三除（朱）

〔表〕」十二ウ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一
二　3コ
三
ウ　3

12－3＝1×2＋2×3＋1

本香[*]には、「一」「二」「三」の地香[*]と「客」の香を各三包、計十二包用意し、このうち九包を出香[*]する。すべて焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。なお、地香のみ、本香の前に試香[*]を行う。客香[*]に試香はない。

さて、本香十二包のうち、六包を除いて、残り六包を二包ずつ結び合わせる。また、除いた六包からは、三包を取り、一炷[*]聞きで「初二度」（一炷目・二炷目）と「終一度」（九炷目）に用いる。前者は、一炷目を「玉鬘内侍」、二炷目を「蘭」と名付け、最後の九炷目を「夕霧宰相」と呼ぶ。残り三包は使わない。つまり、本香は、「玉鬘内侍」「蘭」の一炷聞きから始まり、三炷目からは二炷聞きを三度（伝書には二度とあるが誤りか）繰り返し、九炷目「夕霧宰相」の一炷聞きで終わるという構成をとる。

なお、答えには十炷香札[*]を用いるが、九炷目「夕霧宰相」が、二炷目「蘭」と同香[*]ならば、違う札を打つ[*]。たとえば、「一」の香であれば「一」あるいは「三」の札、「二」の香であれば「一」あるいは「三」の札を打たなければならない。もちろん、「蘭」が「三」の香で「夕霧宰相」が客香であるといった別香の場合は、聞いた通りの札で答えればよい。

記録点は、「玉鬘内侍」「夕霧宰相」を聞き当てた場合は、人数に関わらず三点、聞き違えた場合は星[*]を二つ付す。また、客香の独[*]り聞きは二点、二人以上は一点、地香は、何人聞き当てても一点を加算する。

香[*]之記には、聞き当てた香は名目で記入する。すなわち、一炷聞きの初香・次香と終香は、前掲の「玉鬘内侍」「蘭」「夕霧宰相」と書く他、二炷聞きの場合は、四種類の香の組み合わせによって、十の名目が列挙されている。

蘭之園本は、「一」「二」「三」の地香と「ウ[*]」の香を各二包、計八包用意し、二包ずつ結び合わせて二炷聞きにするという内容であり、竹幽本に比べるとかなり簡略である。だが、十の名目のうち、「おなじ野」「はるけき野」「うす紫」「一の露」「二の露」「三の露」「ふぢばかま」の七つは竹幽本にも見え、とくに「一の露」「二の露」「三の露」が、地香三種類の同香の組み合わせに対応しているという点でも共通する。一方、蘭之園本は、客香の同香に「ふぢばかま」、また、客香と地香との組み合わせに「一のふぢばかま」「二のふぢばかま」「三のふぢばかま」という名目を用いるが、竹幽本はこれらの名目は採用せず、二炷聞きの中に一炷聞きを交ぜることにより、組香の方法自体に変化を与えたものと考えられる。

（2）『源氏物語』との関わり

竹幽本が記録に記す十三の名目のうち、「一の露」「二の露」「三の露」は物語本文には見られないが、「うす紫」以降の後半

の七つは、すべて物語中で詠まれた和歌に拠る。「玉鬘内侍」「夕霧宰相」は、それぞれ「内侍」「宰相」と物語中に出てくるが、これに「玉鬘」「夕霧」という後人が付けた呼称を付して名目としたのである。あらすじは以下の通り。

光源氏は養女にした玉鬘への恋慕をあきらめ、内侍（③三二七頁）として帝に仕えさせることにして、玉鬘の実父に真相を打ち明けた。それまで玉鬘を実の姉と思っていた夕霧宰相（③三二九頁）は、蘭（③三三二頁）を持って玉鬘を訪れ、思いを告白する和歌を詠んだが、玉鬘は返歌でかわした。

おなじ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかごとばかりも

（夕霧の歌。③三三二頁）

尋ぬるにはるけき野べの露ならば薄紫やかごとならまし

（玉鬘の歌。③三三二頁）

夕霧とは逆に、玉鬘に求婚していた柏木は、相手が自分の姉と分かると、今までだまされていたことを恨む和歌を詠んだ。

妹背山ふかき道をば尋ねずてをだえの橋にふみまどひける

（③三四一頁）

玉鬘には多くの恋文が届けられたが、蛍宮にだけ玉鬘は返歌した。

朝日さす光を見ても玉笹の葉分の霜を消たずもあらなむ

（蛍宮の歌。③三四四頁）

心もて光に向かふあふひだに朝おく霜をおのれやは消つ

（玉鬘の歌。③三四五頁）

附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号25330403、いずれも平成25～27年度）における研究の一部である。

注

（1）以下、本文は、新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥（小学館、一九九四～一九九八年）により、その巻数と頁数を（　）を付して示す。なお、本文には、適宜手を加えた箇所がある。

（2）以下、本文は、岩坪健『『源氏小鏡』諸本集成』（和泉書院、

二〇〇五年）による。

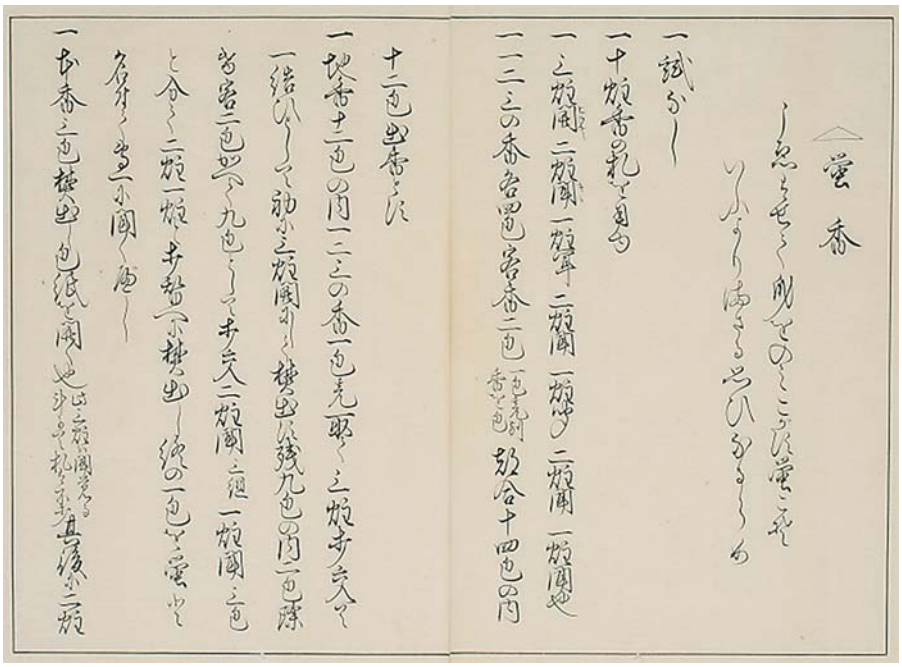
（3）以下、本文は、石田穣二氏・茅場康雄氏『源氏大鏡』（『古典文庫』五〇八、一九八九年）による。

（4）「秋の初風」の名目が依拠しているのは、「秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて」（③二五六頁）とある『源氏物語』本文であろう。

（5）記録の名目「きゆる火」は、『源氏物語』本文の「御前の篝火のすこし消え方なるを」（③二五六頁）に依拠するのであろう。

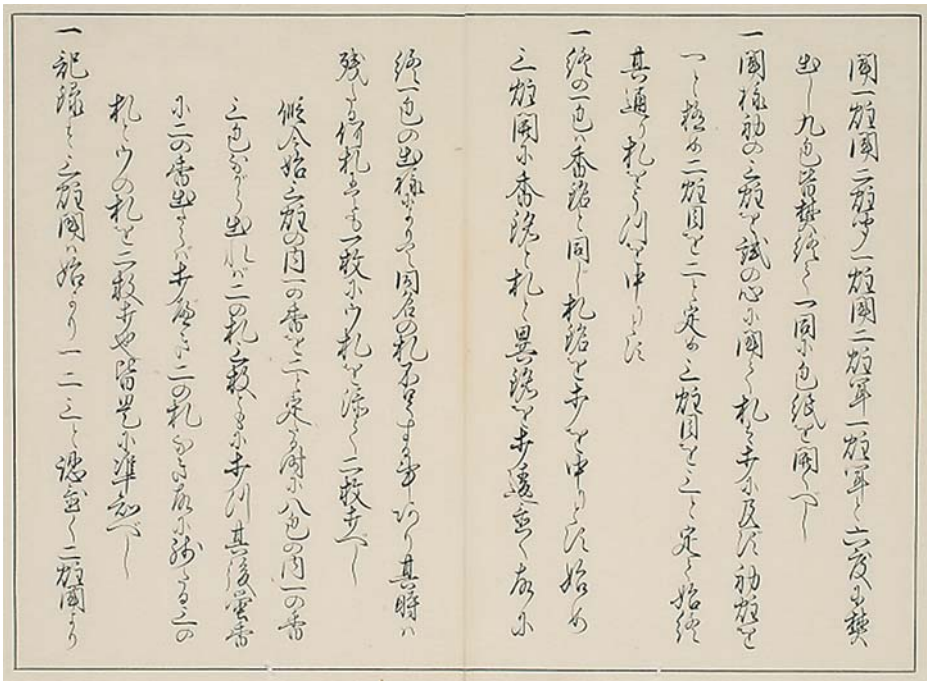
（6）「風のとむらひ」は、『源氏物語』の一節、「風の騒ぎばかりをとぶらひたまひて」（野分、③二七七頁）に拠ると思われる。

【影印】　綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。



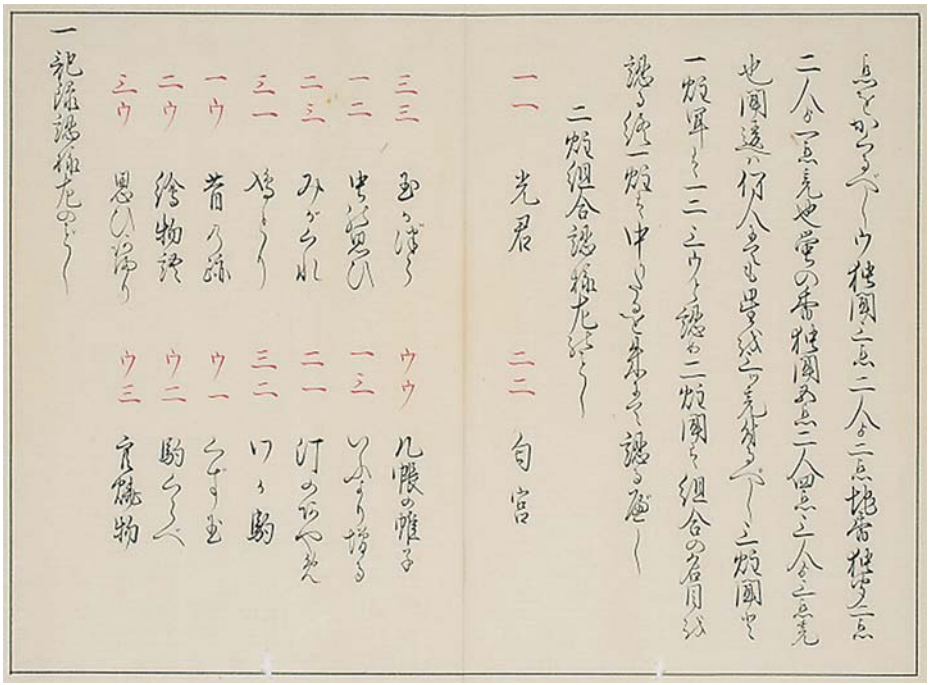
（八十三丁表）

（八十三丁裏）



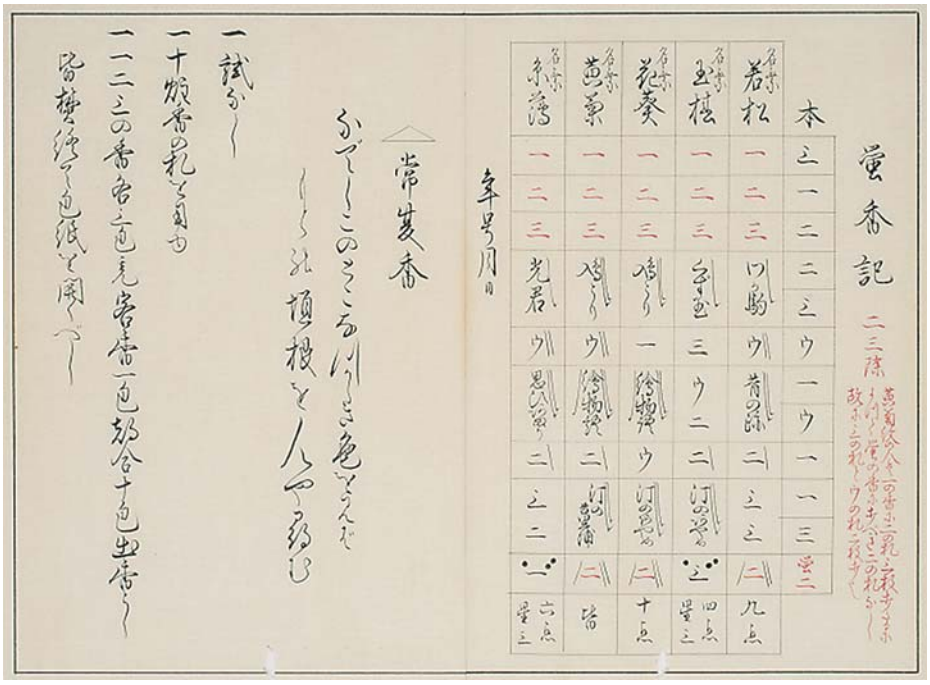
（八十四丁表）

（八十四丁裏）



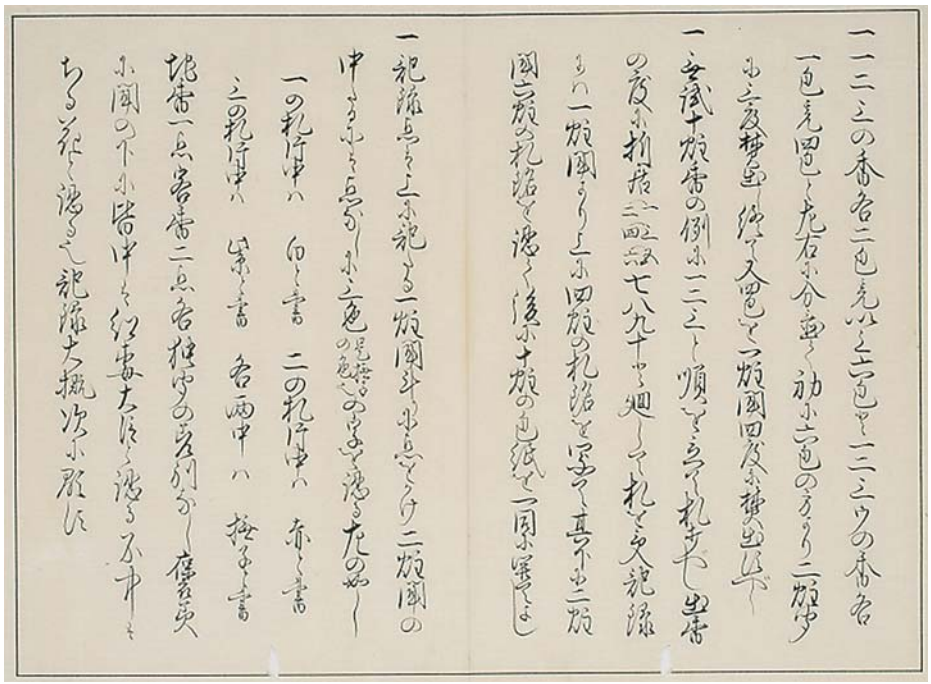
（八十五丁表）

（八十五丁裏）



（八十六丁表）

（八十六丁裏）

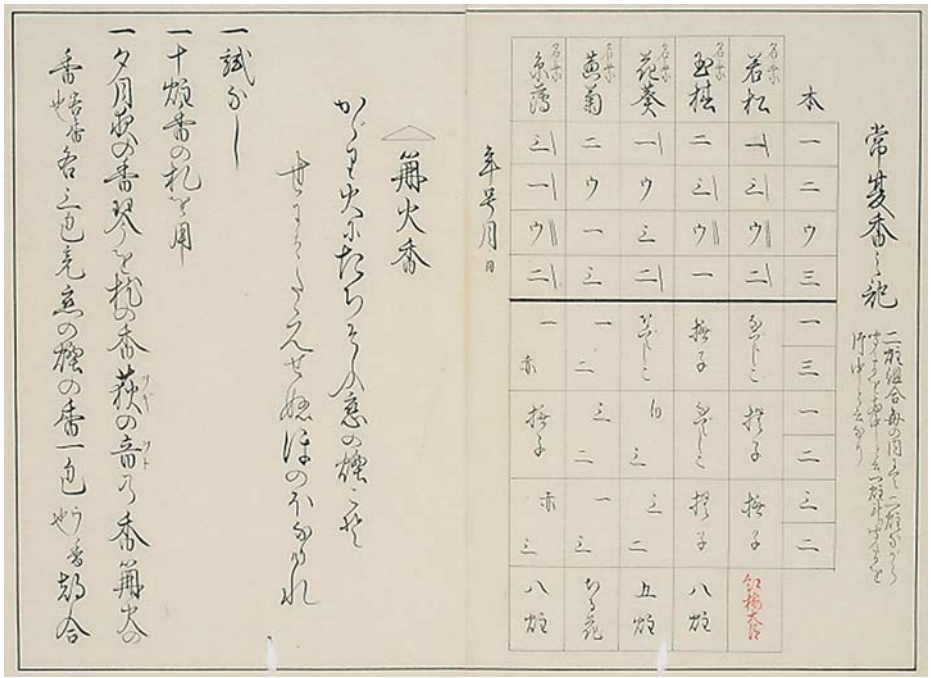


一一二三の香名二色光ハ二百ヤ一二三ウの香名
一色光四色ヽ光名ハ分色ヽ初ハ二色のうち二版ヤ
ハ二度摺色ヽ絞ヽ入色ヽ二版國四度ハ摺色ヽ
一試十版香の例ハ一二三ヽ順ヽ色ヽ札ヤ出香
の度ハ初摺二回ハ七八九十ヤ廻ヽ札ヽ入紙線
ヽ一版國ヽ二ハ四版の札紙ヽ色ヽ真中ヽ二版
國二版の札紙ヽ濃ヽ後ハ十版の色紙ヽ一回ハ色ヽ

一紙線ヽ二ハ紙ヽ二版國ハ色ヽ二版國の
中ヽ色ヽ二ハ色ヽ色ヽ濃ヽ光の如ヽ
一の札ハ中ハ　白ヽ書　二の札ハ中ハ　赤ヽ書
三の札ハ中ハ　黒ヽ書　名両中ハ　抜ヽ書
此香一点名香二点名独ヽの度ハ分ヽ　傳ヽ
ハ國の下ハ皆中ヽ紅ヽ大ヽ濃ヽ下中ヽ
ヽ紙ヽ濃ヽ紙線大概次ハ敬

（八十七丁裏）

（八十七丁表）



常芳香ヽ紙

二版組合毎の用ヽ二版ヽ
ヽ二ヽ二ヽ二ヽ二ヽ二ヽ二ヽ
ヽ二版ヽ

本	一	二	三	一	三	一	二	三	二
若松	一	三	二	多ヽ	抜ヽ	抜ヽ	紅梅香		
白桂	二	三	二	抜ヽ	多ヽ	抜ヽ	八版		
花菱	一	二	三	多ヽ	白	三	三	二	五版
黄菊	二	二	一	一	三	二	一	三	七ヽ光
糸藤	三	一	二	一	赤	抜ヽ	赤	三	八版

年号月日

（八十八丁裏）

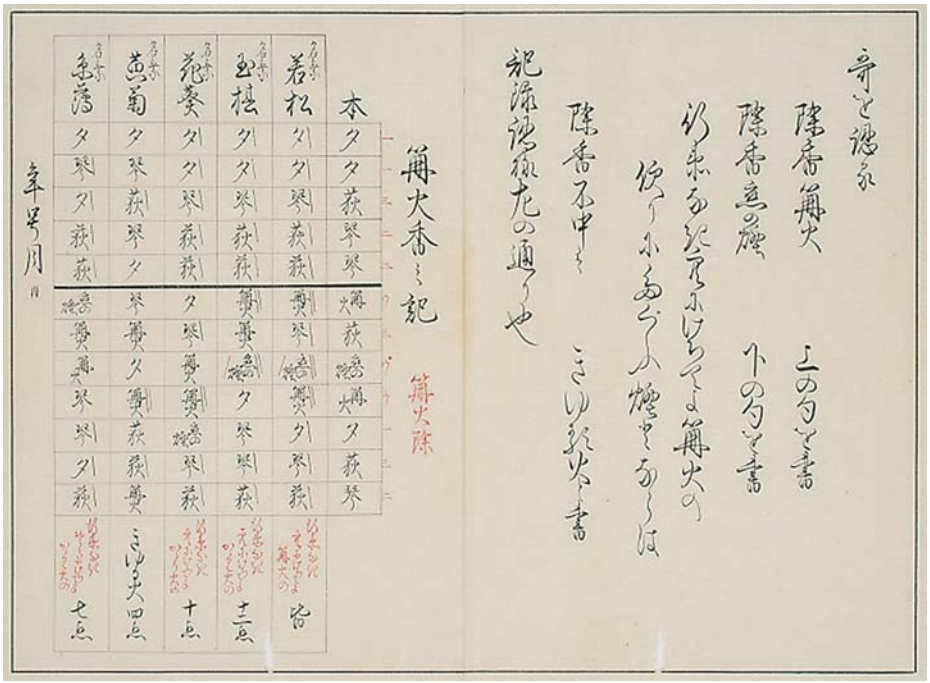
〈兼火香

かゝる火ハ打ちそゝの意の煙ハ
世ヽヽヽ

十二包の内十二包出香ゝ〳〵名種統て包紙て
図くべし
一夕月夜の香琴ゝ琵琶の香名二包元萩の香の香
一包以上五包手文大包〳〵てゝ尤ゝ記置也
箒大の香二包意の煙の香一包文今其内一包
除当(此包の残)の残る地香四包て加え合ゝ七包
ゝ文ゝ又大包ゝ〳〵ゝ右ゝ記置べし
尤包ゝ右包ゝ後ゝ一袋元ゝ種包紙
一袋毎ゝ文今ゝ
一式ゝ〳〵秋ゝ歌ゝ札ゝ名香四袋ゝ手合せゝ
紙四ゝ組ゝ札手箱ゝ全式ゝ歌香のゝ〳〵ゝ
月夜琴ゝ琵琶・萩の香ゝ順ゝ文ゝ札ゝ〳〵右包
の内ゝ箒大ゝ包ゝ意の煙一包文ゝ四包の内ゝ一包
除ゝ残ゝ包文ゝ其除香ゝ中ゝ内合

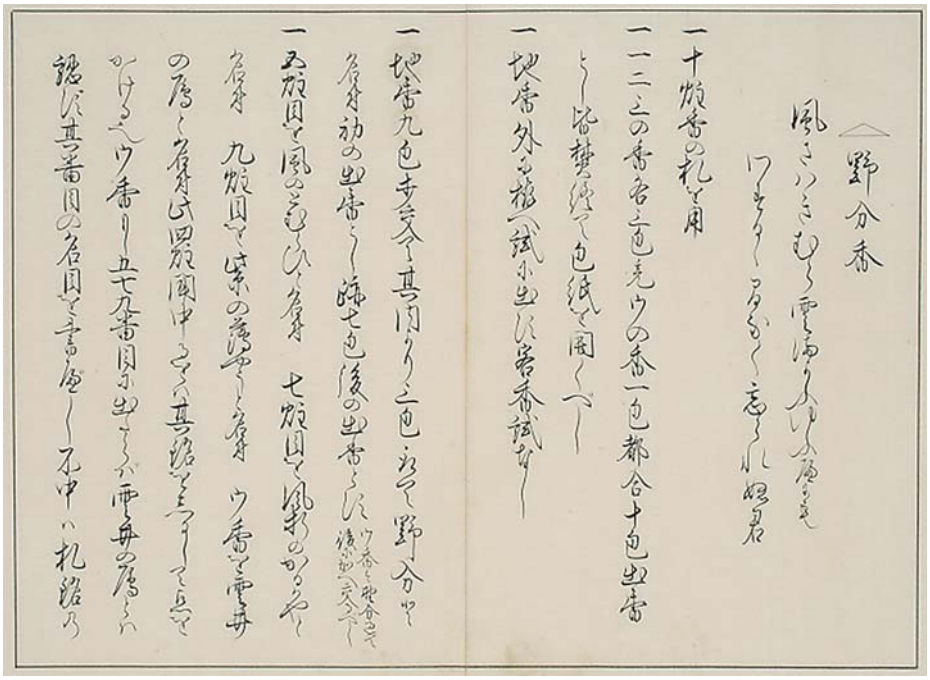
ゝて式ゝ歌ゝ秋ゝ歌ゝ札ゝ手箱ゝ意の
煙除ゝ中ゝ箒大ゝ歌ゝ札ゝ秋ゝ手ゝ
若又箒大ゝ包ゝ内ゝ除ゝ〳〵ゝ内ゝ札ゝ歌ゝ内
何番内ゝ手ゝ意の煙香ゝ中ゝ通ゝ札箱
手ゝ後ゝ名香紙ゝ認ゝ〳〵地香ゝ後ゝ
尤包ゝ内ゝ試ゝ内ゝ別ゝ〳〵
初ゝ手ゝ意の煙ゝ　初意の煙ゝ

中ゝ手ゝ意の煙ゝ　中意の煙ゝ
末ゝ手ゝ意の煙ゝ　末意の煙ゝ
ウ札歌ゝ意の煙ゝ　箒大ゝ香
右ゝ内ゝ別ゝ名香紙ゝ認也
一記置ゝ地香独ゝ二ゝ二人ゝ一ゝ元箒大
独ゝ二ゝ二人ゝ二ゝ元意の煙独ゝ四ゝ二人
ゝ二ゝ元ゝ尤ゝ尤ゝ除香中ゝ



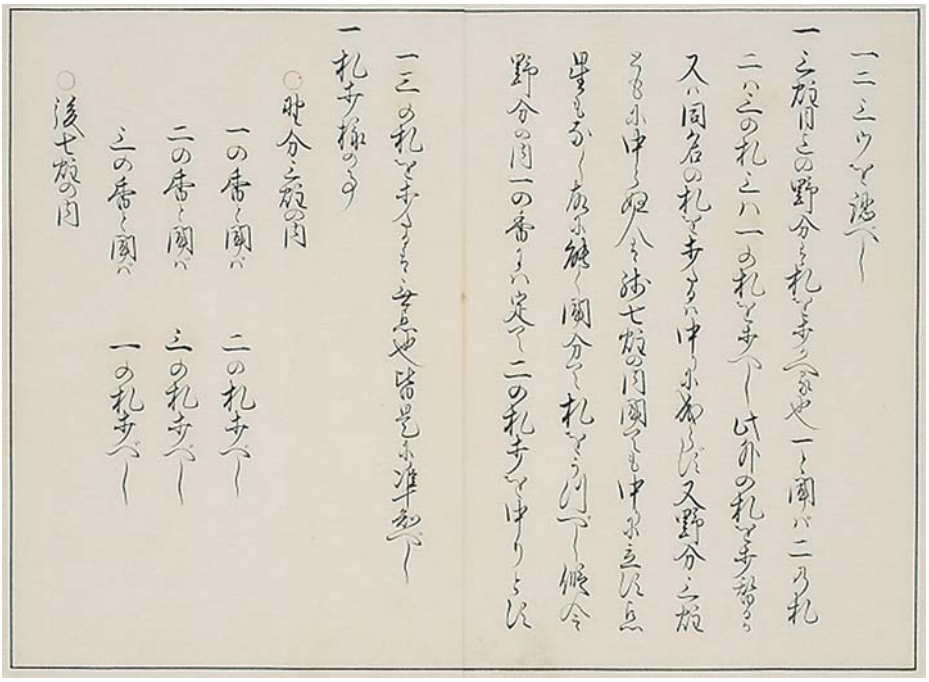
（九十一丁表）

（九十一丁裏）



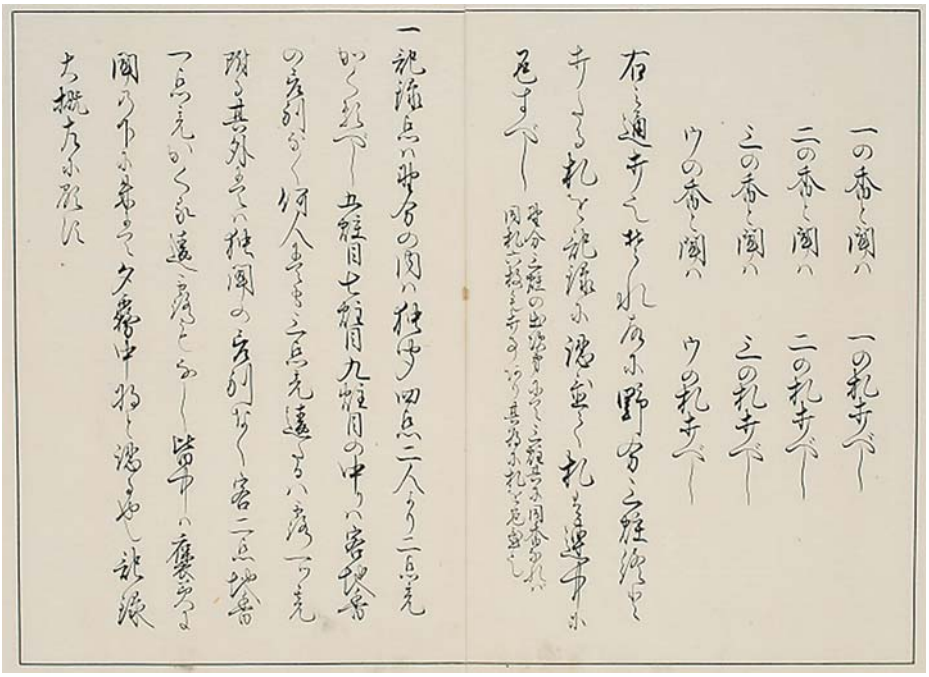
以下、下巻「月」の巻（二丁表）

（二丁裏）



一二ニウテ聞ヘ
一ニ段目ニの野分ニ札ヲ二ツ合ル也一ニ聞ハ二ノ札
二ハニの札ニハ一の札ヲ聞ヘ　以外の札ヲ聞ヲ
又ハ同名の札ヲ聞ハ中ニ有ル共又野分ニ段
ニ成ル中ニ初人ニ成七段の内聞ても中ニ立ル点
墨もかゝ有ル絵ゝ聞分ゝ札ヲ引ヲ聞ヘ候今
野分の内一の番ニハ定テ二の札ヲ中りニ成
一三の札ヲ聞ヲ聞ヲ点也皆是ニ準ズ
一札ヲ極ル
○此分ニ段の内
一の番ゝ聞ハ　二の札ヲ聞ヘ
二の番ゝ聞ハ　三の札ヲ聞ヘ
三の番ゝ聞ハ　一の札ヲ聞ヘ
○後七段の内

（三丁裏）　（三丁表）

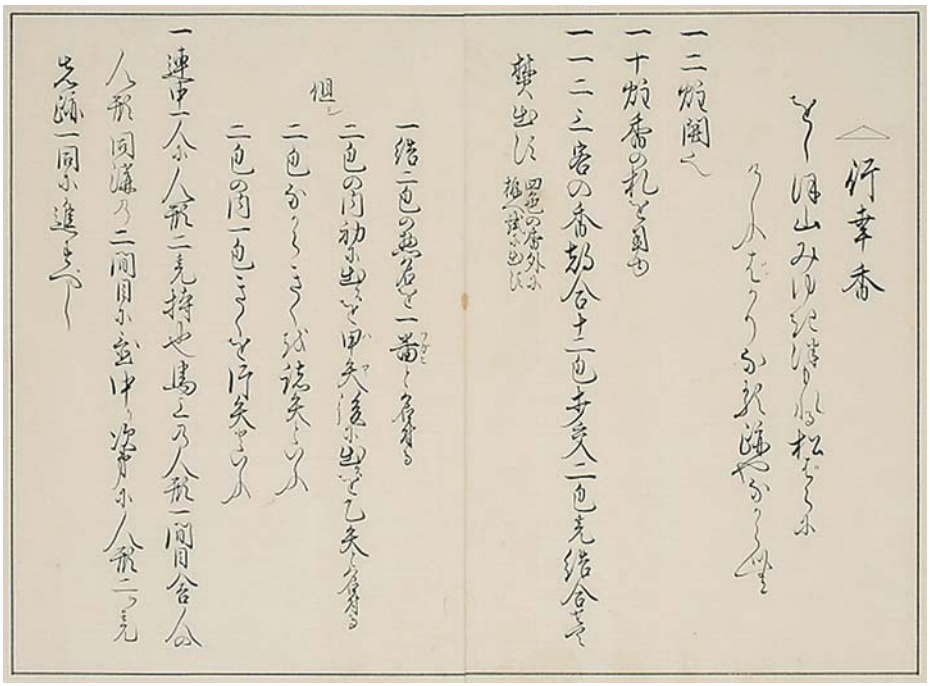


一の番ゝ聞ハ　一の札ヲ聞ヘ
二の番ゝ聞ハ　二の札ヲ聞ヘ
三の番ゝ聞ハ　三の札ヲ聞ヘ
ウの番ゝ聞ハ　ウの札ヲ聞ヘ
右ゝ通ヲ聞ヲ聞ヲ有ル野分ニ経緯ヲ
聞ヲ聞る札ヲ絶ル有ル聞ヲ聞ヲ
見ヲ聞ヘ
一絶流点ハ此分の内ハ独ヲ四点二人ヲ二点ヲ
かゝ有ル聞ヘ　五経目七段目九経目の中ハ客人の
の点ハかゝ何人ヲも二点ヲ遠ヲ有ハ流ヲ
聞ヲ其外ヲハ独聞の点ハかゝ客二点ヲ
ヲ点ヲかゝ有ル遠ヲ点ヲ聞ヘ　皆中ハ褒ヲ
聞の中ニ者ヲ夕霧中ハ流ヲ聞ヘ　絶流
大概ヲ有ル

（四丁裏）　（四丁表）

（五丁表）

（五丁裏）



（六丁表）

（六丁裏）

（七丁表）

一若香花香の園の諸矢の中の一間進む諸矢の園
漂ふ二度の内の一度の内の一間の間を漂ふ
進むべし甲矢乙矢の内の内園の不進（花漂ふ）
一諸矢の二度漂ふ内の其度毎に多く
賜ふ人合人の手に持ち其後二度目の
のみを賜ふも合人に持たば其者に与へ
一御車を園人分ち放ち十人の内も誰にも諸矢園
の内に一間先進むべし二人の内に二間進む人の内に三間
進ませ放ち小袖出し出し者御車に乗り動く
一馬上の人形も小袖出し出し者に乗り出し御車の
後に乗る其後に香を園にも花漂ふ人形
の働かし見せ一の勝に一二の勝となり御車
左右に後に人形を立べし
一花漂の中に斗に漂ふ花漂ふ

（七丁裏）

（八丁表）

行幸香之花

	本	若松	玉椿	花菱	黄菊	糸藤
	ウ	ウ		ウ	ウ	
	二		二	二		二
	一	一		一		一
	三	三	三	三	三	三
	一	一		一	一	
	二		二	二		二
	三		三	三		三
	二	二		二		
	ウ	ウ	ウ	ウ		ウ
	ウ			ウ		ウ
	三	三		三		三
	一			一		一
		花漂ふ一 行矢五	行矢五	帝中	諸矢一 行矢四	諸矢二 行矢四

行幸香之物圖

御車一人
合人一人
園人一人の持ち

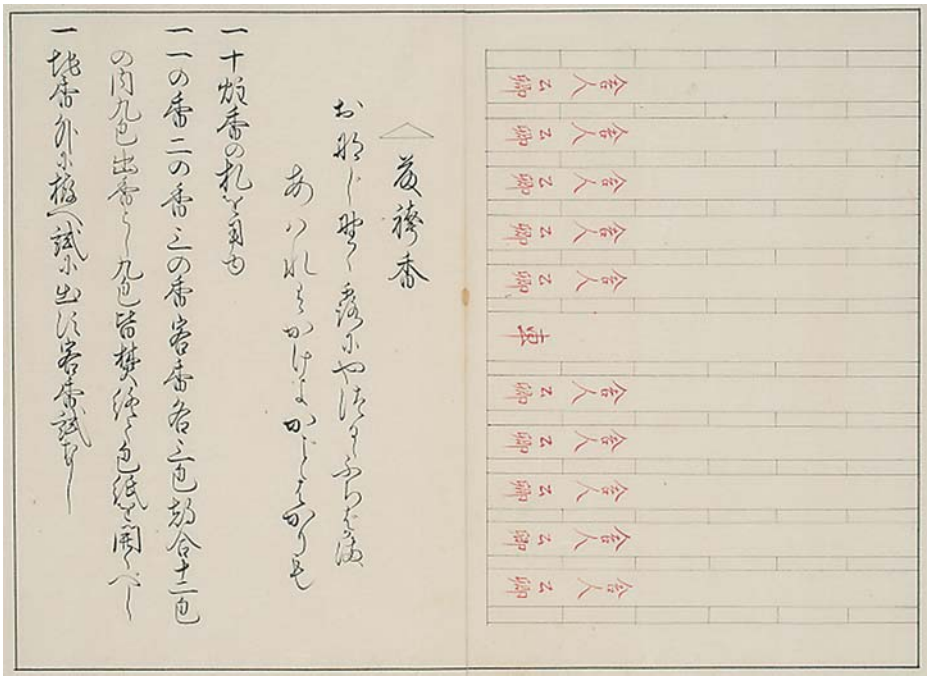
御人形十
馬の上の小袖
引出物

合人人形十
御の船の
人形

（八丁裏）

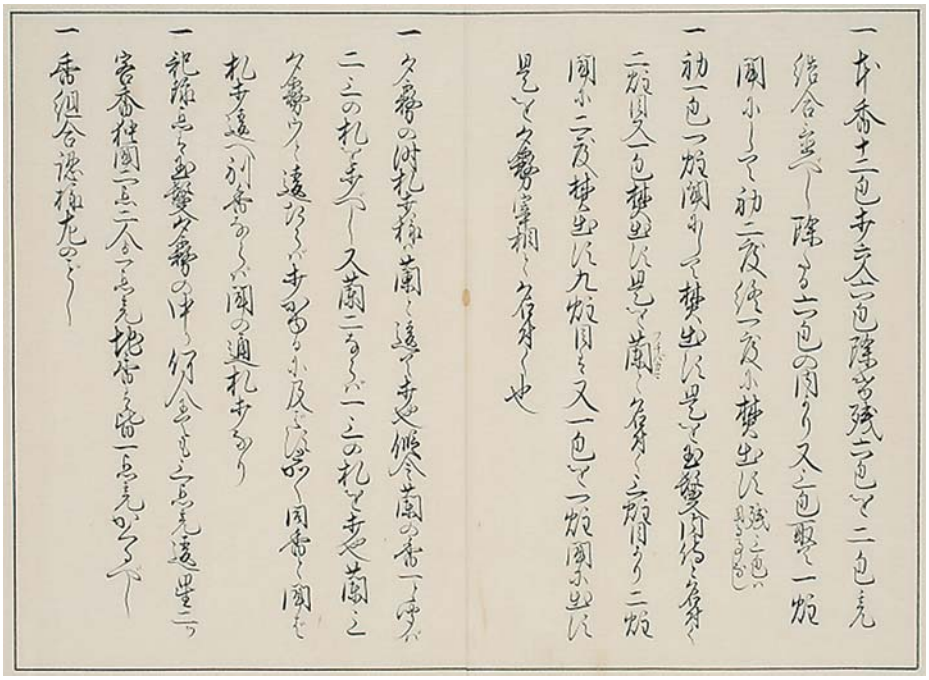
（九丁表）

（九丁裏）



（十丁表）

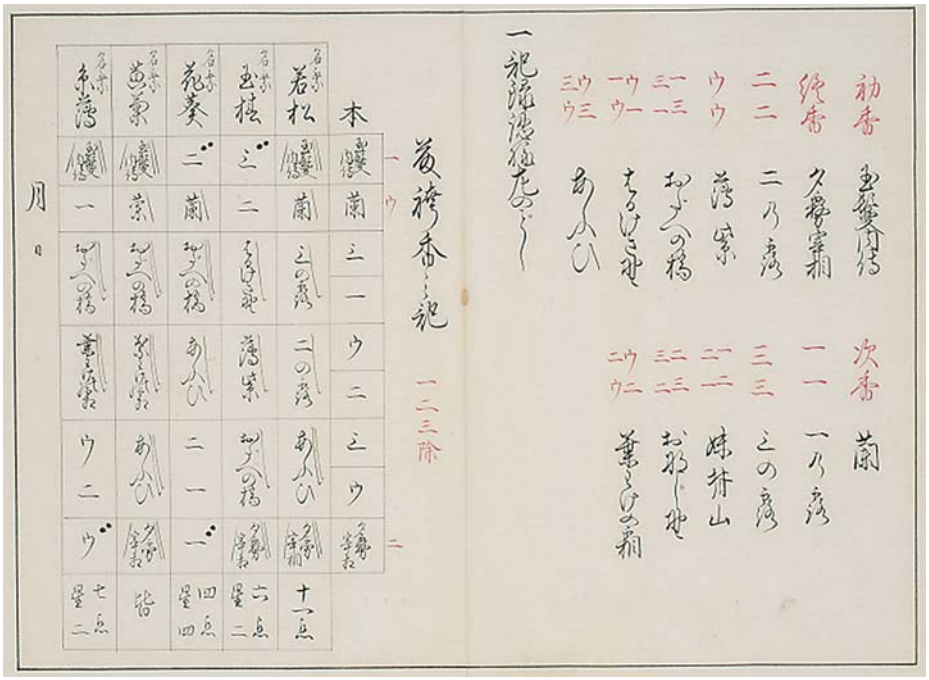
（十丁裏）



一　本香十二包　五人一包　除き残り二包　二包を
結合　一包の内より又二包取て一炉
聞ふして初二度絶つ度ふ焚出し（残り二包）
一　初一包一炉聞ふして焚出し是を玉鬘に結ぶ
二炉目入一包焚出し是を蘭に名付　二炉目より二炉
聞ふ二度焚出し九炉目に又一包にて一炉聞ふ出し
是を夕霧宰相に名付也
一　夕霧の御礼参　蘭に遣て参る　御今蘭の香一参
二三の礼参る　又蘭二参る　一三の礼参る　蘭に
夕霧ウに遣ひ参る　ふ及ぶ　聞香に聞き
礼参る　別香なくば聞の通礼参る
一　紀伊守　玉鬘夕霧の中へ行　今も二参る　遣は二
客香　聞二点　二人合　もえ　地香　香一点　もえ　ひろべ
一　香組合　徳利花ひろべ

（十一丁表）

（十一丁裏）



初香　玉鬘内侍　次香　蘭
終香　夕霧宰相　一一　一ノ歌
二二　二ノ歌　三三　三ノ歌
ウウ　藤袴　二一二二　妹背山
三一一三　おもかへの移　三二三三　おもかへし
二ウ一ウ　たるひさし　二ウ三ウ二　薫ひの宰相
三ウ三ウ　あふひ

一　紀伊守徳利花ひろべ

後袴香　紀　一二三除

本	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
玉鬘	蘭	三	一	ウ	二	三	ウ	玉鬘	蘭	三	一	ウ
若松	蘭	三の移	二の移	あふひ	名香宰相	十一点	名香宰相	玉鬘	蘭	三の移	二の移	あふひ
玉椿	三	二	たるひさし	藤袴	あふひ	名香宰相	六点 墨二	名香宰相	藤袴	おもかへの移	たるひさし	藤袴
花菱	二	蘭	おもかへの移	おもかへの移	あふひ	二	一	名香宰相	二	蘭	おもかへの移	あふひ
名香宰相	薫ひの宰相	薫ひの宰相	おもかへの移	薫ひの宰相	あふひ	名香宰相	四点 墨四	名香宰相	薫ひの宰相	薫ひの宰相	おもかへの移	薫ひの宰相
名香宰相	玉鬘	一	おもかへの移	薫ひの宰相	ウ二	ウ	名香宰相	名香宰相	玉鬘	一	おもかへの移	薫ひの宰相
名香宰相	玉鬘	蘭	三の移	二の移	あふひ	名香宰相	七点 墨二	名香宰相	玉鬘	蘭	三の移	二の移

月日

（十二丁表）

（十二丁裏）